

# 3 ことばを知る・使い方を知る・可能性を知る 「考える力」を鍛え、 広い視野と深い洞察力を得る方法論



岩崎 美紀子  
IWASAKI Mikiko

筑波大学名誉教授

変化の荒波を乗り切る羅針盤となるのは「考える力」である。自分のなかに「思考の軸」をもつことができれば、どのような人生を送るにしても、羅針盤になってくれる。「考える力」を鍛えるための方法を紹介する。

## 認識

どのように認識するかは人それぞれである。同じものを見ても、同じことに遭遇しても、人によりとらえ方が異なる。同じ人物であっても、認識が変わることで現実の受け止め方が違ってくる。ものごとは見方や考え次第で重くも軽くもなる。

認識という行為を意識しなければ、他人の意見や思い込みに囚われてしまう。近年のネット社会は、個人が発信できるようになったことで、情報が氾濫し、内容の真贋はわかりにくい。自分の勘違いでも事実のように発信する。偽りを事実のように配信するフェイクニュースもある。事実は、実際の出来事だけでなく、つくられるようになった。多くの人が賛同すればそれが事実のようになる「多数派の専制」が出現し、異なる意見をもつ個人への攻撃が匿名で

容易に行われるようになった。世の中が思考停止の状態に陥りかけている。

情報の洪水にのまれてしまう危険は、物理的に情報を遮断すれば回避できる。スマホやパソコンから離れるデジタルデトックスが最近流行っている。一定の時間、静かな世界に浸れる。しかし現実には情報を遮断し続けることはむづかしい。翻弄されないように自衛するしかない。それは自分にとって心地よい情報のなかに埋没するのではない。情報への警戒と懐疑をもちながら、自分の思考を機能させるのである。そのためには、「知る力」をまず鍛える。

## 「知る力」「伝える力」

「知る」とは、検索をしてわかった気になることではない。考えるための材料を手に入れることである。材料が悪ければ、思考は歪む。

「知る力」の基本は、事実とそれ以外の区別である。事実判断と価値判断の区別といってもよい。例えば報道は実際に起こった事実を伝えるが、その背景や詳細を伝えるにあたって、伝える側の価値判断が入り込むことがある。ワイドショーでは感想やコメントが中心になっている。

文章を読むときは、次のような作業を試みる。  
①事実の部分、他からの引用／切り貼りの部分、著者の感想や意見を、それぞれ色の異なるマーカーで線を引く。②形容詞／副詞に印をつけ、説明的なものや情緒的なものに分ける。③1文ごとに主語、述



認識



知る



伝える

語、目的語を確認する。④語尾表現をチェックする。これができるようになれば、内容の本質が理解でき、自分が文章を書く場合の「伝える力」も格段に増す。

自分の考えを相手に伝える場合、何が事実で何が感想かを区別できれば、自分にとっても相手にとってもわかりやすいものになる。事実の部分は他者と共有でき、組織においては共通の土俵となる。

仕事は基本的に共同作業で、価値観や認識の異なる人と一緒に仕事することになる。目的がありそれを達成するために協力する。仕事を進める上で基本となるのは情報の共有で、その情報が信頼できるものでなかったら、その上にたつ仕事は揺らぐ。

情報は刻一刻と変化するものであり、情報獲得作業には速さが要求される。目の前の情報を鵜呑みにせず、事実かどうかを見きわめる必要もある。ウラをとることが情報の正確さにつながるが、現実には1つ1つウラをとっている時間はない。ではどのように速さと正確さを両立させるのか。

多角的視野と体系をもつことである。全体像を想定すれば、部分と全体の関係がわかり、断片的な情報もその中に位置づけられる。体系のなかでとらえれば、その情報の信頼度や重要度を推し量ることができる。人的ネットワークをもっていれば、内容の

確認や、さらなる情報を得ることが可能になる。いかに能力があっても自分1人ではできないこともある。「伝える力」があれば、異なる分野の人々の力を借りることもできる。

## 「考える力」を鍛える方法

多くのことを知るだけでなく、立体的・多角的に体系としてとらえられるようになるには「考える力」を鍛えればよい。

### ・問題の3つの立て方

問題の立て方には「何 (what)」「なぜ (why)」「どのように (how)」の3つがある。「何」が問われる場



考える

表1 問題の3つの立て方と回答

	求められる回答	回答を得る作業	回答の作法
what	情報、知識	調べる、集める	叙述
why	原因、理由	分析する	説明
how	具体的対応	手順をつくる	処方

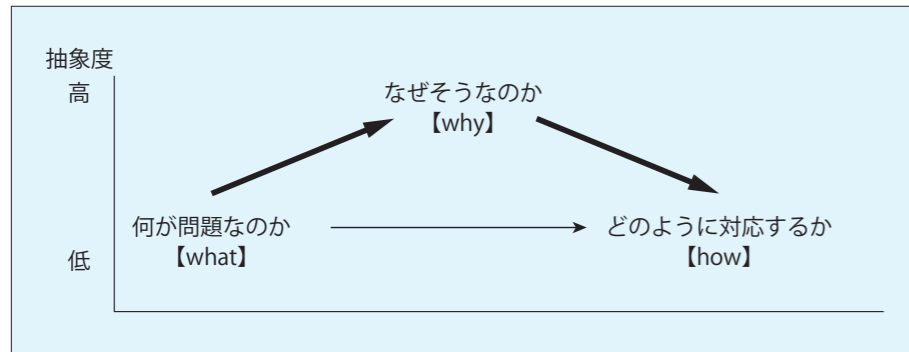


図1 抽象の階段 - what, why, how -

抽象の階段というのは、立体的／体系的な思考を鍛えるためのモデルで、「抽象度が低い＝個別性／具体性が高い」「抽象度が高い＝一般性が高い」ということを、階段のような段差として示している。3つのうちwhatとhowは具体的個別事項が対象となっており、whyは原理やメカニズムを探るため、図1のよ

うに位置づけられる。合、求められているのは情報や知識で、それを得るために調べる。「なぜ」が問われる場合、求められているのは原因や理由で、情報や知識を分析する。「どのように」が問われる場合、求められているのは具体的対応で、問題解決の処方をする。わかりやすくまとめると表1のようになる。

どれが正しいというのではない。なぜならそれぞれの目的に応じて求められるものが違うからである。例えば調査報告書はwhat、マニュアルはhow、論文や推理小説はwhyを設定する。重要なことは、問題の立て方にはこの3つがあり、何を求められているかで使い分け、使いこなすことである。

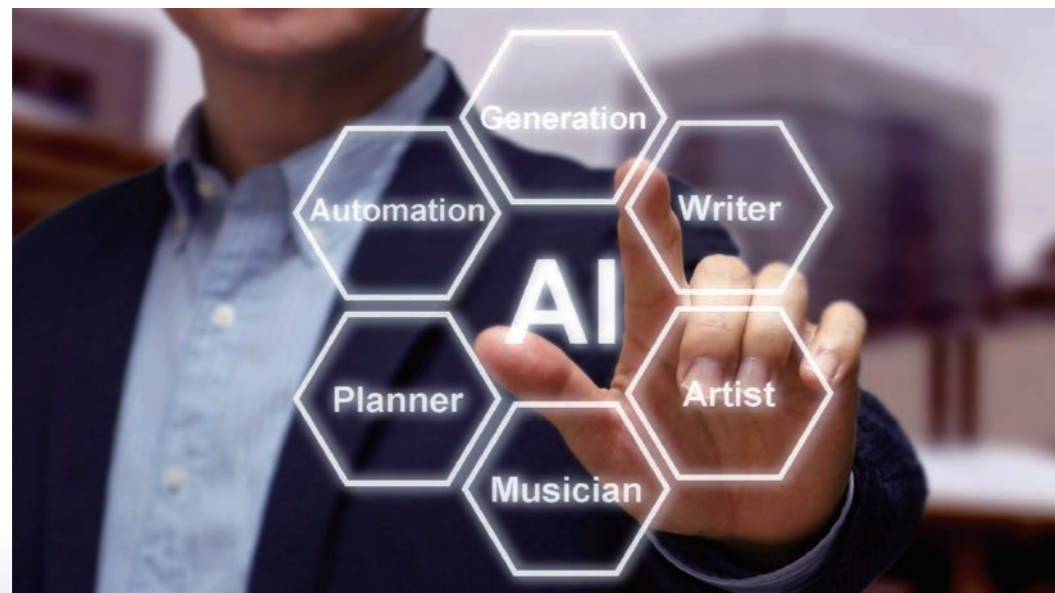
・抽象の階段

次にこれら3つを、抽象の階段に位置づけてみたい。

うに位置づけられる。

考える力を鍛えるには、太矢印で示したように、抽象の階段の上り下りをする。上には「なぜ」という疑問をもつことが必要である。そしてその回答を持って階段を下り実証を試みる。知識が足りないと思ったらwhatにもどる。what, why, howをセットにし、抽象の階段の上り下りを繰り返す。

細矢印で示したように、whatからhowに直行すれば、現実レベルのまま抽象度は変わらない。全体像がわからないまま、目先のことに囚われる。日本では受験勉強はwhatを覚え、合格のための受験技術howを習得する。覚えることとわかることの違いに気づけず、大学入学後に戸惑う学生が多い。最近ではwhatもそこそこにhowが書かれたハウツー本が多い。



AIを活用するイメージ

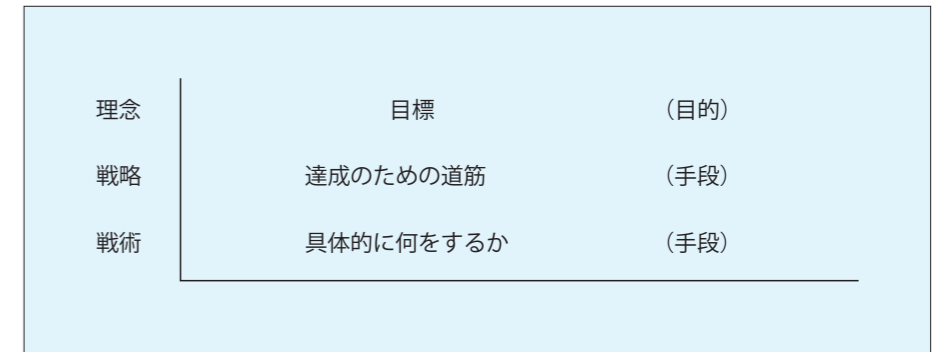


図2 抽象の階段 - 理念・戦略・戦術 - 目的と手段

AIは、膨大なデータから答えを瞬く間に導き出す。whatに答えることが得意である。情報処理能力は優れるが、既存のデータに基づくものであり、データそのものの誤りや恣意性は判断できない。データが蓄積されていくなかで歪みが増幅される危険がある。

AIは問いに答えるのは得意だが、問いを作り出すことはできない。whyを考えることができない。人間が機械と異なるのは、疑問を持ち、考えることができることである。想像力と創造力を持ち、whyという疑問をもてるか、それを言葉に乗せて表現できるか。考える力が不可欠となる。

政治や政策でもwhyが重要である。whyがなければ、目の前の利害関係にとらわれ、とりあえずの対症療法となる。より長い時間の幅で国のあり方を俯瞰的に考え続けながら、社会の多様な意見を集約する統治が求められる。

抽象の階段を上り下りすることで、立体的／体系的思考ができるようになれば、図2で示したように、理念・戦略・戦術の違いが明確になる。戦術は理念を実現するための手段であり、手段と目的は抽象のレベルが異なる。

日本は理念（構想）が弱いため戦略がたたず、目先の戦術に明け暮れる傾向が強い。断片的な施策が積み重なり、身動きがとりにくくなり、手段が目目的化しがちである。

・なぜなぜチェーン

「なぜ」という疑問をもつと、それまではそれが当然だと思っていたこと、所詮こういうものだと思っていたことが、実はそう思い込んでいた（思い込まされていた）だけに過ぎないと気づく。先入観に囚われていたことがわかり、目から鱗が落ちる。

「なぜ」は、狭い世界から飛び出す契機であり、考える出発点である。問題発見能力と問題提起能力の双方を刺激する。「謎解き」への好奇心が手伝い、知識をスポンジのように吸収する。謎に直接関係ないように見えても重要な情報もある。ジグソーパズルのピースのように、それだけ見てもわからないが、それがないと絵は完成しない。想像力が必要と



ロダンの考える人

なる。

「なぜ」を問い、それに答えようとする思考の過程で、次の「なぜ」が生じる。「なぜ」の連鎖（なぜなぜチェーン）が考える力を鍛える。既存の価値観を打破する新しい発想が生まれたり、想定外に対応する応用力がつく。少なくとも3回のなぜを試みてほしい。

<参考文献>

- 1) 岩崎美紀子『行政改革と財政再建 -カナダはなぜ改革に成功したのか-』御茶の水書房、2002年
- 2) 岩崎美紀子『比較政治学』岩波書店、2005年
- 3) 岩崎美紀子『「知」の方法論 -論文トレーニング-』岩波書店、2008年
- 4) 岩崎美紀子『1票の較差と選挙制度 -民主主義を支える三層構造-』ミネルヴァ書房、2021年